

左衛門成美の子。名は養、字は土修、通稱晋四郎、同齋と號し、嘉遜・眠雲山房・小泉漁夫の別號がある。年十五の時江戸に出て、書を市河米庵に學び、後朝川善庵に養はれて嘉永二年その家を繼ぎ、書道と儒學とを兼ね、松浦侯の江戸に在るとき爲に屢經を講じた。安政四年十月廿二日歿、享年七十四。小梅常泉寺に葬り、門人私諡して紹復先生というた。

アサカヒサノリ 淺加久敬 ↓アサカミチサト 淺加通郷。

アサカミチサト 淺加通郷 通稱九丞、初諱は久敬。元祿八年父左平太の遺祿六百石を襲いだ。寶永七年御近習番となり、享保元年組外番頭に進み、十年免せられ、十二年二月五日七十一歳を以て歿した。淺香氏は左馬助。その子作左衛門・その弟左平太・その子通郷と續いたのだが、作左衛門の時に香を加に改めたとあるから、通郷は正に淺加であるべきのに、自身淺香と書いてゐることもある。通郷淺香山の古歌に探つて山井と號し、和歌を能くし、國史に精通した。嘗て徒然草の隱晦にしてその通讀し難きを慨し、古來の諸註を取り、十五年を経て徒然草諸抄大成二十卷を編し、貞享五年刻成るに及んで、之を藩侯の覽に供へた。その他尙武家耳底記二卷・列國雜記三卷・四不語錄三卷(一名吼嘯物語)十葉抜書・三日月日記一卷・道程記二卷・都の手ぶり一卷等の著がある。今存する道程記には久敬軒謙益とあるが、三日月日記には久敬軒とするから、前者は誤であらう。

アサガヤ 朝ヶ屋 アサ カイ 河北郡湯涌郷に屬する部落。

アサガノジソウ 麻殿の地蔵 ↓ヒロエ

廣江。

アサクラエキ 朝倉驛 江沼郡の古郷名で、兵部省式に『加賀國驛馬朝倉潮津・安宅云々各五正。』と見えるものである。津田鳳卿の延喜古驛道考略に、朝倉驛疑はらくは朝倉氏が越前を奪つてから、國人その姓を避けて吉崎と改めたのであらうといひ、又加賀志徴には、兵部式の驛路を考ふるに、越前國二尾驛より加賀朝倉驛へ續き、それより潮津驛へつづくのであるから、朝倉はいづれ吉崎邊であらうとしてゐる。しかし吉崎ならば越前とすべきである。江沼郡橋がそれで、中世にも立花驛としたものだとする説を探るべきであらう。

アサクラカゲズミ 朝倉景純 通稱左源太。左傳次・武太夫。字は粹夫、東軒と號した。詩を作ること數千首に及び、その筆を下すや、推敵を用ひずして一氣に呵成したから、瑕疵の點々たるものあつたが、毫もこれを顧る所がなかつた。景純祿百五十石を受け、延享四年六十八歳を以て歿した。

アサクラカゲノリ 朝倉景繼 通稱萬三郎。左傳次・久作。父景純の後を繼ぎ、祿百五十石を受け、御馬廻組に班し、表御納戸奉行・御書物奉行に任じ、寛政十二年六月十二日歿した。景繼一諱を歟といひ、白雪と號し、詩を好んだが、その作に見るべきものなかつた。

アサクラキヨウカイ 朝倉曉海 江沼郡山中眞宗東派壽經寺の僧。開即院と稱し、高倉學寮に學んで、大正元年擬禪に任ぜられた。同八年二月十八日七十五歳を以て歿。

アサクラサダカゲ 朝倉貞景 (一)加越の反目―長享二年加賀の本願寺門徒が富樫政親

を滅すや、先に越前の朝倉貞景が將軍足利義尚の命を奉じて、政親を助けんとしたことを憤り、之に對し怨を報いんとし、朝倉氏の爲に越前を追はれた甲斐氏も之を煽動した。この時恰も貞景は後見を離れて政を專にし、將に祖業を恢弘せんと欲する際であつたから、兩勢力の衝突は常に國境附近に起ることゝなつた。

(一)第一次衝突―明應三年十月の衝突に於いて、朝倉氏は牙營を越前中郷に置き、細呂木・金津・三國・長崎・豊原・北庄等に兵を出し、之に對する甲斐氏及び加賀一揆の聯合軍は小松・本折・福田・菅生・大聖寺に進んだ。既にして十八日甲斐軍先づ大野郡を侵し、廿一日吉田郡豊原寺を攻撃したが、朝倉軍の優勢に敵する能はずして又加賀に竄入した。

(二)第二次衝突―永正三年七月十五日加賀の一揆復越前に入り、九頭龍川以北に放火し、兵庫・長崎等に陣を張つたから、越前の本願寺門徒で之に應ずるものもあつた。貞景乃ち叔父宗簡に軍を統べしめ、高田派・三門徒等の僧俗をも集めた。八月二日能美郡の一揆川を渡つて黒丸を襲うたが、朝倉軍之を防いで河合藤八郎・山本圓正を殲した。又九頭龍川には江沼郡の一揆を主とし、能美郡の部隊及び越中の安養寺・瑞泉寺之に参加して高木の陣に迫り、鴨鹿口では河北郡山一番・里一番の陣に越前の超勝寺・本覺寺を加へて進んだが、急湍容易に涉ること能はずして、互に矢戦を交へた。又石川郡の一揆と河北郡の光徳寺・勝願寺等は中郷の渡に向かつたが、越前軍の總帥宗簡機先を制して河を超え、逆擊して加賀軍を粉砕し、河南に在つた一揆は友

軍の敗北を聞いて忽ち背進したので、溺死するもの甚だ多かつた。越前の本覺寺・超勝寺もこの後加賀に流浪した。

(四)第三次衝突―次いで本覺寺・超勝寺はその勢力を挽回する爲、豊原寺を攻めて九頭龍川以北を制せんとする策を建てた。一揆等之に附和し、同年十月十日越前の堂前口・文珠堂口に進んだが、西谷の明王院之を防ぎ、朝倉勢も來り會して一揆を犇北せしめた。

(五)第四次衝突―永正四年本覺寺・超勝寺は本國に還住せん爲、能登・越中の軍を催促せんことを本願寺に求めたが、本願寺は之を顧みなかつた。石川郡の玄忍乃ち自ら奮つて事に當らんと欲し、同志を集めて坂北郡坪江郷の帝釋堂口に向かひ、八月廿九日干戈を交へた。しかも敵鋒鋭くして二魁先づ退いたが、玄忍の軍は取へて動かず、將卒三百人枕を並べて戦死した。

(六)第五次衝突―永正七年にも亦加越の衝突があつたことは、四月十七日附を以て將軍足利義種が朝倉貞景に感狀を與へてゐることから推察される。若し之を三・四年の戦役に對する褒賞だとすれば、餘りに遅い感があるからである。而して貞景は同九年三月に歿して、子の孝景が家を襲いだ。

アサクラシユメ 朝倉主馬 前田利常に仕へ、初めて百五十石を領した。子孫相繼いで藩に仕へた。

アサクラソウテキ 淺倉宗滴 ↓アサクラサダカゲ 朝倉貞景。アサクラタカカゲ 朝倉孝景。アサクラヨシカゲ 朝倉義景。

アサクラタカカゲ 淺倉孝景 永正九年三月越前の朝倉貞景歿して、子孝景後を受けた。